
性別人間と幽霊人間

嵐金

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

性別人間と幽霊人間

【Nコード】

N9628Z

【作者名】

嵐金

【あらすじ】

高校2年生へ進級を果たした安藤未来。

春になり、部活動の勧誘がスタートする中、未来は、勧誘先で従兄弟に再会する

プロローグ

吸血鬼、吸血天使、天界少年、魔界少年、人間天使……ここ数ヶ月で、色んな者に遭遇して、そのたびに何かを得て、何かを学んできた。

暁文のおかげで、自分に自信を持つことが出来た。

グレイのおかげで、自分の良さに気付く事が出来た。

瀬夏のおかげで、子供嫌いが治り、今は小さい子が可愛いと思えるようになった。

カラスのおかげで、素敵な彼氏を見つけることが出来た。

紅丞さんのおかげで、心から人を好きになることが出来た。

これからも、何かに遭遇して、そのたびに何かを得て、何かを学ぶだろう。……そんな気がする。

……って、いきなりエピソードのような感じになってしまったが、これはあくまでプロローグ。

今回は、幽霊体質になった人間と、久しぶりに再会した従兄弟の話。

噂話

4月。私は高2に進級し、紅丞さんは人間に戻り、無事に学校への復帰を果たした、月の後半。

「未来くん！！大ニュース大ニュース！！」

朝。綾子が、人がまばらに集まった教室で、大声で、しかもあろう事か”くん”付けで話しかけてきた。

「綾子……あんたねえ、いい加減にしないと私もそろそろ怒」

「あーあー！説教なら後で聞くから！！それよりも大ニュースだよ！！」

「まったく……何？」

「1年生に、スツゴくカッコいい眼鏡の男子がいるんだって！！もしかしたら、佐川先輩以上かもよ！？」

「カッコいい男子がいるなんて、正直な所、興味ゼロなのだが、”佐川先輩以上かも”と言う言葉に、少しカチンと来た。

「……紅丞先輩以上？」

「そう！！噂によると、近寄った女子はみんなその男子に惚れちゃうほどカッコいいらしいの！！……もしかしたら、未来も惚れちゃうかもよ！？」

綾子は何故か、ほかの誰よりも早く、私と紅丞さんが付き合ってる事と、同棲していることを探り当てた。私も紅丞さんも隠してたのに……もしかしたら、探偵にでもなれるのかもかもしれない。

「……あのねえ、私は顔で紅丞先輩を選んだわけじゃないの。たとえば、その男子が紅丞先輩よりもかつこよくても、惚れるわけないでしょ。」

私は、紅丞さんの事は、家では”紅丞さん”だが、学校では”紅丞先輩”と呼んでいる。

「ヒューッ！ラブラブですねぇ安藤未来さん！」

「はいはい……。」

「……でさつ、私ね、今日はその男子に、会いに行こうと思うんだ。だからさ、未来も一緒に行かない？」

「わ、私も？……なんで？」

「本当に惚れちゃわないかどうか、確かめたいのさ！……ついでに、演劇部の勧誘とかしちやえば？」

確かに、去年から、演劇部には女子の入部希望者が耐えない。……紅丞さんがいるのが原因なのは目に見えているが。

「でも、確かにこれじゃあ、演劇部がキャバクラになりかねないからな……うん、私も行くよ。」

「ありがとー未来ー。」

「で、その男子、なんて名前なの？」

「確かねえ……津谷つたに陸りくって言うんだって。」

「津谷、陸……あれ？……どこかで聞いたことあるような……？」

「ん？もしかして、知り合い？」

「いや、多分気のせいだと思っ……多分。」

「そっか。じゃあ放課後に津谷君の所に行ってみよー！！」

綾子は意気揚々と自分の席に戻っていった。

部活

私は今、演劇部の活動拠点 講堂にいる。

今の時期、演劇部は、活動してはいなく、色々な生徒に勧誘をしまわっている……いわば、勧誘期間真っ盛りなのだ。で、今日は勧誘方法の作戦会議の真っ最中。

関係者以外立ち入り禁止なので、綾子には講堂の外で待ってもらっている。

会議終了。

ある生徒はそのまま帰り、ある生徒は勧誘に行った。

私は、ちょうど津谷陸の話を出したところ、そいつを勧誘しにいけと言われたので、綾子と一緒に行くことにした。

「ついた、ここだよ。」

1年3組の教室前に到着。

「でもさ、綾子。もう放課後だし、さすがに帰っちゃったかな？」
意外と会議が長引いたし、有り得るかも。

「いやいや、聞いた話によると、津谷君は、辺りが暗くなるまで帰らないらしいよ。もしかしたらまだいるかも。」

綾子はそう言いながら、教室の扉をノックした。
ガラッと、扉が開く。

「はい？……あれ？」

そこにいたのは 見たことのある人物だった。

再会

噂の男子、津谷陸。

その容姿は、眼鏡をかけてはいるが、確かに顔立ちがよく、見た女子全員が惚れてしまうのも頷ける。

そして、彼の顔には、見覚えがあった。

「えっと……誰？」

彼は綾子の顔を見ながら質問した。

「私達、演劇部の勧誘で来たんだけど……。」
演劇部でも無い綾子が話し始めた。

「演劇部？」

「あつ、私は演劇部じゃなくて、こつちが演劇部なの。」
と、言いながら、綾子は私の方を見た。

「えっと、そつちの人は……もしかして、安藤未来？」
名前を言い当てられた。

やっぱり、私はこの人に会ったことがある。

「……もしかして、陸？」

「やっぱり、未来だよな！？」

陸の顔が一気に明るくなった。

「未来だあー！久しぶりーっ！！」

そして、あろう事か、私に飛びついてきた。

「うわっ！？ちよつと、陸！離れなさい！！」

「え？あ、ごめんっ。」

陸は私から離れた。

その光景に、綾子は目を丸くしていた。

「え？え？……未来、津谷君と知り合いなの？」

「えっと……私の、従兄弟なの。」

「い、従兄弟お！？…初耳なんだけど！？」

「私も、会うまで忘れてたのよ。」

それを聞き、陸が食いついた。

「未来、忘れるなんてひどいよ。」

「ご、ごめん……。」

なんか、綾子と陸って、キャラがかぶってる気がする……。

「……で？今日はどうしたんだっけ？」

陸がワクワクしながら聞いてきた。……従兄弟相手に勧誘って、なんとなく罪悪感が……。

「えっ……と、陸、何部に入るか決めた？」

「んー……まだ。」

「演劇部とか、どう？」

「演劇部ねー……まだ迷ってる。でも、未来が入ってほしいって言うなら、入るけど？」

「じゃあ、頼めるかな？」

「おう。……顧問に入部届け、出せばいいんだっけ？」

「うん、それじゃ、またね。」

「はーいっ。」

私たちは、講堂に戻ることにした。

報告

講堂に戻ると、紅丞さんが勧誘に行かせた生徒を待っていた。

「紅丞先輩！」

紅丞さんに駆け寄る。

「あ、やっぱり未来だったか。」

「” やっぱり” って、どういう事ですか？」

「未来の足音が聞こえたんだよ。」

「あ、そう言うことですか……。」

紅丞さんは、4月の始めから、月の中頃にかけて、ある事件が原因で、人間ではなく天使になってしまっていた。のだが、カラスのアイデアのおかげで、無事、人間に戻ることが出来た。

でも、完璧な人間ではなく、私のように、人間ではない力を持つ事になってしまったのだ。

その力と言うのが、「五感がランダムにパワーアップする」というもの。

簡単に説明すると、特に何もしていないのに、聴覚・嗅覚・味覚・触覚・視覚のうちどれかが、ランダムに選ばれ、飛躍的にパワーアップしてしまうということ。

……パワーアップの限度は決まっているようなのだが、どのタイミングで、何をパワーアップさせるのか、は選べないようで、本人はまだまだに慣れることが出来ずに困っているらしい。

この前なんか、睡眠中に聴覚がパワーアップしてしまって、自分の心臓の音が邪魔で一睡も出来なかった、と語っていた。

「……てことは、今、聴覚がパワーアップしてる、って事ですか？」

私は綾子から離れ、綾子には聞こえないくらいの小声で質問した

小声でも、今の紅丞さんには普通の音量に聞こえるだろう。

「ああ。……ついでに言うと、嗅覚もパワーアップしてる。」

「それは、大変ですね。」

「大丈夫だよ。」

小声で会話する私たちの後ろで、綾子がニヤニヤしながら私たちを見ていた。

「……ちよつとすみません。」

紅丞さんに断りを入れ、綾子の元へ向かう。

「ちよつと、綾子。何ニヤニヤしてんのよ。」

「いやあー、小声で何話してんのかなーなんて思って……。」

「別に、何でもいいでしょ？……気にしないでよ。」

「カップルの会話ほど気になるものはないよ？」

「はあ……つたく……。」

「で？先輩に津谷君の事、言った？」

「あ、言つてなかった。」

「……未来い、最近凡ミス多いよ？幸せ疲れですかあ？」

「嫌みつたらしく言わなくていいから。」

とりあえず先輩の所に戻る。

「……紅丞さん、聞いてました？」

また小声で話しかける。

「ああ。……新入部員か？」

「はい、それも、私の従兄弟なんです。会つのは……だいたい、5年ぶりくらい何ですけどね。」

「へえ……従兄弟……。」

……何故ジト目……。

「私、別に浮気しませんから。」

「まあ、それなら良いけど……。」
すると

「あつ……。」

「どうしました？」

「嗅覚が元に戻った……。あ、でも視覚がパワーアップした……。」

「……なかなか休まりませんね。」

「ああ……本当、困ってるよ……。」

その時、

「未来ー、何してんのー。」

しびれを切らした綾子が私を呼んだ。

「……なんか、すみません。やっぱり綾子は帰らせるべきでしたね

……。」

「いや、別に大丈夫だけど……。」

私は再び綾子の元へ行った。

「……未来くん、愛し合うのは構わないが、私の存在を忘れないでくれよ?」

「わかってるよ……。」

「……じゃ、私、用事思い出したんで、帰るよ。後は2人でお幸せに」。そんじやつ。」

綾子はカバンを持って帰ってしまった。

「なんなのよ、まったく……。」

「未来。」

後ろから紅丞さんが私を呼んだ。

「何でしょう?」

「俺たちも、もう帰るか。」

「でも、ほかの部員を待たなくていいんですか?」

「いや、ほかの奴らは、さつき帰った。」

「え、じゃあ私が最後の1人って事ですか?」

「そう言うことだ。……じゃ、帰るか。」

紅丞さんは、近くにおいてあるカバンを持って歩き出した。

私

も後に続いた。

手紙

「紅丞さん、ちょっと、教室に行きたいんですけど、良いですか？」
「忘れ物か？」

「はい。……ノート忘れちゃって。」

「わかった、一緒に行くか。」

「はい、ありがとうございます。」

俺と未来は、2年4組の教室に向かった。

「ちょっと待つててくださいね。」

未来は俺を入り口に残し、教室に入った。

窓側の、一番後ろ。恐らくそこが、未来の席だろう。

「……あれ？」

机の中を探していた未来が、そう呟いたのが聞こえた。

「未来？どうかしたのか？」

「なんか、手紙が入ってるんです……。」

手紙？まさか……ラブレター？

俺はとりあえず教室に入った。

「あ、勝手に入っちゃダメですよ。」

「いいだろ……で、手紙ってなんだ？」

「これです。」

未来が机から出したのは、茶封筒に入った手紙だった。……「丁寧
に、封に糊付けされている。

「誰からだ？」

「差出人が書かれてないんです……開けて見ますか？」

「未来が見たいと思うなら、開けてもいいんじゃないか？」

「では、失礼して……。」

未来は指で器用に封筒を開け、中から手紙を取り出した。

「な、何？これ……。」

未来の顔が真っ青になった。俺も手紙を覗いてみた。手紙には、まるで血のような真っ赤な字で、”お前に絶望を味あわせてやる。”とだけ書いてあった。

「不気味だな……。」

「一体誰が……。」

未来は脅えるように、封筒に手紙をしまった。

「未来、そんな物、捨てた方がいい。どうせ誰かのイタズラだろ。」

「そう……ですかね。」

「ああ。…何かあっても、俺が守ってやる。」

「紅丞さん……ありがとうございます。」

未来は、手紙を封筒ごと、くしゃくしゃに丸めてゴミ箱に捨てた。

「……それでは、帰りましょうか。」

「ああ。」

俺たちは玄関へ歩き出した。

…誰かのイタズラにしては、やり過ぎだと思う。だって、あの手紙の字……未来には言えなかったが、俺は今、視覚がパワーアップしているので解る。

あの字は、どう見ても 人間の血で書かれていた。

……妙な胸騒ぎがする。

帰る前に……

「紅丞さん、聴覚、今どうなってます?」

玄関で、未来が俺に質問する。

「まだパワーアップしたままで……。」

「そうですね……それでは、聴覚が戻るまで、少し待ちますか? 今外にでると、車が凄いいみたいです……。」

確かに、玄関からでも、外の車の走行音が耳に入る。

「そうだな……少し待つか。」

とりあえず、廊下にあるベンチに、二人で腰を下ろした。

……しばしの沈黙。遠くにある体育館からは、バスケットボールが弾む音が聞こえる。多分、バスケット部が部活中なのだろう。……それよりも……

「……未来。」

「何ですか?」

「もう少しくっついてもいいんじゃないのか?」

未来は何故か、俺から30cmくらい離れた所に座っていた。

「いや、だって、私が近寄ったら色々面倒になるかな、と思いきして……。」

「面倒? ……どういう意味だよ?」

軽く未来を睨む。

「いや、その……紅丞さん、今聴覚がパワーアップしてるんですよ? じゃあ私が近寄ったら、私の心臓の音が聞こえて、耳障りかなーと思いきして……。」

未来は申し訳無さそうに答えた。

「はあ……今更何言ってるんだよ。」

「えっ……?」

「俺は、例え未来の心臓の音が絶えず聞こえるような環境に置かれても、その音さえも愛せるといって自信があるぞ。」

「……………」
未来の顔が赤くなった　可愛い奴だな。

「あ、ありがとうございます……………」
未来は恥ずかしそうに、俺にくつつくように座り直した。

トクツ、トクツ　……………直接聞いているわけじゃないのに、未来の心臓の音が鮮明に聞こえる。……………もちろん俺自身の心臓の音も鮮明に聞こえる。

実は、脈拍が違う2つの音が、偶然重なる時があるのだが、俺はその音が好きなんだ。……………未来には内緒だけだな。

「ふふつ……………」
つい、口元が緩んでしまった。

「紅丞さん？……………今、笑いました？」

「いや、ちょうど、未来と俺の心臓の鼓動が、ほぼ同じくらいのタイミングで重なって……………なんか面白くて……………」

そう言った途端、未来の心臓の鼓動が速まった。……………ああ……………タイミングがズれていく……………」

「おい、何照れてんだよ、タイミングがズれたじゃないか……………」

「うっ、うるさいです。気にしないでください……………」

「そうは言っても、聞こえちまうしなあ……………」
俺は嫌みっぽく答えた。

「……………やっぱり私、離れた方がいいですか？」

「いやいや、そんなこと言っていないから……………」

「でも……………」

その時

キーン……………」

酷い耳鳴りが俺を襲った。

「……………」

思わず頭を抑える。

「紅丞さん？……どうしたんですか？」

「いや、ちよっと耳鳴りが……。」

数秒後、ようやく耳鳴りが止んだ。

と、同時に、心臓の音が聞こえなくなった。

「……聴覚が元に戻ったみたいだ。」

「そうですか。……それじゃあ、帰りましょうか。」

未来は立ち上がった。……俺も後に続いた。

帰り道

「未来、手、繋ぐか。」

急に、紅丞さんからそう言われた。

「……今はほかの生徒もいないみたいですし……良いですよ。」

私は、無防備だった紅丞さんの右手に自分の左手を　俗に言う、

”カップル繋ぎ”してやった。

「え？こ、これって、カップル繋ぎ？」

紅丞さんが予想以上に焦っている。

「何焦ってるんですか？紅丞さんから誘ったんですよ？」

「いや、そうだけど……。」

紅丞さんは恥ずかしがって俯いてしまった。……なんか可愛い。

「さあ、行きましょうか。」

私たちは家に向けて歩き出した。

「そういえば、紅丞さん。」

「何だ？」

「今、視覚がパワーアップしてるんですよね？」

「ああ……2キロ先の道路標識が見える。」

「視覚がパワーアップするって、視力が上がるだけなんですか？」

「いや、高速で動く物が見えたり、見えちゃいけない物が見えたりする。」

「見えちゃいけない物って、何ですか？」

「それは、アレだよ、その………忘れてくれ。」

「嫌です、教えてください。」

「……。」

「紅丞さん？」

「お、俺は悪くないぞ。視覚が勝手にパワーアップするから。」

「言い訳なんて聞きたくないです。何が見えてるのか教えてください。」

「……………」

次の瞬間、紅丞さんは私の手を振りほどき、走り出した。

「あっ！！紅丞さん、逃げないでください！！」

紅丞さんは、男のくせに体力がそんなに無い。…………女とはいえ、中学時代は空手を習っていた私に適うはずがなかった。

私は紅丞さんの腕を掴んだ。

「ほら、捕まえましたよ！！」

「！？…………お前速すぎるんだよ！！」

「紅丞さんが遅いんです！！さあ、もう逃げられませんよ！」

「頼む！許してくれ！！」

「許す許さないの問題ではなく、言う言わないの問題でしょう!？」

「つ…………じゃあ、言わない！！」

子供か、まったく…………でも、私もそろそろ気にし過ぎかもしれない。

「はあ…………わかりました。このことは忘れます…………」

「助かった…………あつ…………」

「どうしました？」

「視覚が元に戻った…………」

「てことは、今は普通の状態ってことですか？」

「…………いや、触覚と味覚が一気にパワーアップした…………」

「触覚って、ヤバいじゃないですか。」

「風が身体に当たって痛い…………」

「大丈夫ですか?…早く帰りましょう。」

「だな…………」

紅丞さんは痛みに耐えながら、足早に帰宅した。

自宅

「痛ってえー……。」

紅丞さんは玄関に入るなり、私に寄りかかって来た。

「だ、大丈夫ですか!？」

「平気……。ただ、足痛い……。」

「それ平気じゃないですよ!!しっかりとってください!!」

玄関での騒ぎを聞きつけたのか、家の奥からグレイが走って来た。

「未来ちゃん!紅丞!!どうかしたの!？」

「あつ、グレイ……紅丞さんが……。」

「紅丞、大丈夫?」

「全然……身体中痛すぎる……。」

何で私には”平気”って言うておいて、グレイには”全然”なのだろう……。

「とにかく、一度部屋に運ぶから、グレイ、手伝って。」

「うん。」

部屋に入り、紅丞さんをベッドに寝かせた。

「痛っ……なあ、もう少し優しくしてくれないか?」

「男なんですから、耐えてくださいよ。」

「でも……痛い……。」

触覚がパワーアップすると、文字通り、触る感覚が鋭くなるので、そよ風とか雨とかが痛く感じる……らしい。

以前、いたずらで耳に息をフーツとやった時にはキレられた。…紅丞さん、キレると意外に怖い。

「紅丞、まだ痛む?」

「うん……しばらくほっといてくれ……そのうち元に戻るから……。」
「わかった。」

「紅丞さん、何かあったら遠慮せずに言ってくださいね?」

「ああ……ありがとう、未来。」

「……じゃあ、私たち、リビングにいるますから、元に戻ったら降りて来てくださいね。」

「わかった……。」

私とグレイは部屋を後にした。

「ねえ、グレイ。紅丞さんの事なんだけど……。」

「紅丞が、どうかした?」

「あの”五感がパワーアップ”する力、どうにかならないかな?その……操れるようになる、とか。あのままじゃあまりにも紅丞さん可哀そうで……。」

「気持ちはわかるけど、さすがにそれは僕にもカラスにもどうしようもないよ。紅丞が慣れるようにならないと……。」

「でも、触覚がパワーアップしたり、聴覚がパワーアップしたりすると、さすがに生活に支障がでてしまうし……。」

「うーん……一応、姉ちゃんに相談してみるよ。」

「メルに?どうして?」

「姉ちゃんは吸血鬼よりの天使だし、もしかしたら、何か知ってるかもしれないからね。」

「ふーん……確か、グレイとメルさんって、腹違いの姉妹……なんだっけ?」

「うん。姉ちゃんは僕のパパが僕のママに会う前に会った吸血鬼の間に生まれた子だからね。」

今、物凄くわかりづらい言い方された気がする。

「と、とにかく……メルに聞けば何かわかる?」

「あくまで可能性だけだね。」

「わかった。ありがとう。」

その時 携帯のバイブが鳴った。ディスプレイには知らない電話番号が載っていた。

「……誰だろう？」

出てみた。

「もしもし！」

…陸だった。

「陸！？…あんた、私の電話番号知ってたっけ？」

「いや、あの後、日比野綾子って人を見つけて、聞き出した。」

綾子…なんてことを…。

「未来ちゃん、どちらさま？」

後ろから 그레이 が声をかける。

私は携帯のマイク部分を抑えながら

「私の従兄弟。…ちよつと待っててね。」

再び携帯を耳にあてる。

「で、陸、何の用？」

「ちよつと聞きたいことがあってな。……未来、彼氏いるって本当か？」

「え？あ、まあ一応……綾子から聞いたの？」

「うん。……驚いたよ、まさか未来に彼氏がなあー…未来って、同性愛者だったっけ？」

「違う。」

即答しといた。

「え？違うの？てつきりそうかと…。」

「んなわけないでしょ、女の時の私の彼氏よ。」

「じゃあ、男の時はどうやって接してるんだ？」

「男の時は…女になるまで接してない。」
「っていうか、男になった時は速攻、暁文やグレイに血を分けて女に
してもらってるから…なんて、陸に言えるわけない。」
「てか…あれ？確か未来って、怪我すると性別変わるんだよね？」
「いや、それ、違うみたいで…最近わかったんだけど、大量出血
すると性別が変わるらしいのよ。」
「てことは、いつも大量出血して性別を変えてる…ってことか？
何のために？」
「何のためって…。」
「考えてなかった…。」
「未来？もしもし？」
「あ、ごめん、その…何のために変えてるのは、ちょっと言え
ない…かな。」
「ふーん…まあいいや。んじゃ、そろそろ切るぜ。」
「うん、またね、陸。」
「おうっ。」

電話を切り、携帯をしまう。

「未来ちゃん、従兄弟って…未来ちゃんの性別の事知ってるの？」
「うん。」
「その人、学校の友達？」
「友達って言うか…後輩、かな。会うのは5年ぶりなんだ。」
「5年ぶりってことは、小学校以来、ってこと？」
「そういうことになるね。懐かしいな…小学生の時はずっと一緒
に遊んでたよ、家が近所だったし。」
「へえー…。」
なぜかグレイがニヤニヤしながらこちらを見ている。
「…グレイ、何か企んでる？」
「い、いやっ、別に？」

あ、目え逸らした。

「グレイ？」

軽く睨む。

「いや、その……ただ、従兄弟だったら、小さいころ、未来ちゃんがどついう子供だったのか知ってるのかなー？とか思ってた……」

「あぁー……」

小さいころの私……か。そういえば1度もそついう話をしたことが無かった。

まあ、簡単に言うと、小さいころの私は、小学校、中学校と、9年間、立て続けにイジメにあつてた。

ことあるごとに暴力を受け、そのたびに性別を無理矢理変えられて……という毎日だった気がする。

気がするつていうか……正直な話、辛^{つら}すぎて無意識のうちに記憶から消去してしまった部分があるので、詳しくは覚えていない。

「……ま、そのうち話すよ。」

「うん。楽しみにしてるね。」

多分、話す事はないだろう。グレイには刺激が強すぎるかもしれない。こついう約束は自然に忘れてもらった方がいい。

「未来、帰つたのか？」

玄関の奥の方から暁文が歩いてきた。

「あ、うん、ただいま。」

「おかえり。……今、いいか？」

私は小さく頷き、暁文に近づく。

暁文は私を抱き寄せ、首筋の噛み痕にあわせるように歯を突き刺した。

「痛つ……暁文、グレイがいるんだから、もう少し慎重にやったほうがいいんじゃない……？」

「ん……そうだな。」

暁文は私から離れ、肩を掴み、吸血した。

「……終わったぞ。」

暁文は俺から離れた。

俺はゆっくりとソファに座る。

「なあ、未来。」

「何？」

「出来れば、今度から背伸びしてくれないか？……歯が刺しづらいからさ。」

「解った。でも、それだったら、座って吸血した方がよくないか？」

「まあ、最初はそうだったけど……今は立ったままの方がやりやすいんだ。」

「ふーん……じゃあ、次からは背伸びすればいいんだな？」

「ああ、頼む。」

暁文はそう言うと、リビングの隅にかけてられているコートを着ると、リビングを出て行くとした。

「暁文、どこ行くんだ？」

「ちよっと、アルトのところ。」

「グレイは、一緒には行かないのか？」

「グレイは……どうする？」

暁文はグレイを見ながら質問した。

「他の吸血鬼のところには行きたくない……。」

「じゃ、未来と一緒にここにいてくれ。多分、夕方には帰ってくるから。」

「うん、気をつけてね。」

「ああ。」

暁文はリビングの扉を開けると、俺たちに背を向けたままこう言った。

「……未来、グレイに変な事するなよ？」

「した事無いだろ！」

素早く反論すると、暁文は逃げるように家を出ていった。

「ったく……あの性悪吸血鬼……。」

無意識に、そう呟いた。

「未来ちゃん！そういうこと言っちゃ駄目だよ！！」

ヤバ、聞かれてた。

「ご、ごめんなさい……。」

暁文とグレイは相思相愛の仲だから、互いの悪口を誰かが言っているのとはかく許せないのだそうなの。

謝っても、グレイの瞳は黒いままだった。

「悪かったって……機嫌直してくれよ。」

とりあえず撫でながら謝罪する。

グレイは、吸血鬼とはいえ、天使の血が混ざった吸血鬼。撫でられるのには弱いのか、たちまち瞳がピンク色になっていく。

「もうっ……。」

最後には、機嫌を直してくれたようだ。
すると

ピンポーン

家のチャイムが鳴った。とりあえずでることに。

「はい。」

玄関に行き、扉を開けると、そこにいたのは

「よっ！未来！」

陸だった。

従兄弟

「…………え？」

俺はつい、その場で硬直してしまった。

「おーい、未来ー？」

陸がわざとらしく俺の眼前で手を振る。

「えっ？あぁっ…………え？」

…………なぜ、ここが解つたのだろうか？俺と紅丞さんが同棲している事は綾子しか知らないはず　あ、だからか？

「いや、”え？”はこつちの台詞だよ。いつ性別変わったんだ？さつき電話したときは女だったろ？」

そうだった。まずい、話題を変えねば…………。

「えっと…………綾子に聞いたのか？」

「え？何を？」

「ここを。」

「え？…………ああ、うん。”従兄弟なら”って、特別に教えてもらっただんだ。」

綾子の奴…………でも、陸なら良いか。

「陸、わかってると思うけど、このことは　」

「わかってるわかってる。これだろ？」

陸は自分の口の前に人差し指を立て、”静かに”のポーズをした。話が早くて助かる。

「　とはいえ、詳しい場所までは教えてもらってなくてさ。その辺歩いてる人に道聞いちゃったよ。」

陸は、少し照れながら答えた。　って、その辺歩いてる人？

「……なあ、陸。」

「ん？」

「その…今言ってた、歩いてる人って、どういう人だった？」

「えっと…かなり長身で、コート着てる、男の人だった。」

…… 晁文だ。

「そ、そうか……。」

「にしてもさ、その人、目が赤かったんだよ。それに、天気良いのに、フード被ってたし……これじゃあまるで」

陸は、俺の目を見ながら、こう言った。

「 吸血鬼。みたいだよな？」

瞬間、俺は、脳内の隅から隅まで凍り付くような感覚に襲われた。

「……って、未来？顔真っ青だけど、大丈夫か？」

「えっ？……ああっ、大丈夫、大丈夫……。」

嘘だ。ちつとも大丈夫じゃない。

「な、なあ、陸。どうして、その人が吸血鬼だっと思ったんだ？」

「いや、俺が今読んでるネット小説に出てくる吸血鬼の特徴と似てたからさ。長い八重歯もそうだし。」

…… なあんだ。そう言うことか……。

「未来ちゃん、どちらさまだったのー？」

ふと、リビングから 그레이 が歩いてきた。

「あっ。」

そして、陸の姿をとらえた。……どうやらもう帰ったと思って出て

きたらしい。

「うおっ！？未来、あいつ誰！？めっちゃめっちゃ可愛いじゃん！！」

「え、あ、いや、その……。」

陸の言葉に、グレイが頬を赤く染めた。 やめなさい、グレイ。

それやっちゃうとマジで可愛いから。

「し、知り合いの子だよ。……ちょっと待ってて。」

俺は慌ててグレイをリビングの奥に引っ込めた。

「知り合いの子って……金髪だったぞ？あの歳で髪染めるのって、やばくない？」

「か、海外の子なんだよ……。」

ちよっと苦しい誤魔化し。

「ふうん……ま、いつか。じゃ、俺、もう帰るわ。」

「ああ、またな、陸。」

「おうっ、んじゃなー。」

陸は元気に返事を返し、家を出ていった。

陸

どうしても、解らないことが1つだけある。

俺が、未来の住んでいる家に行く道中に遭った、あの吸血鬼。

そして、未来と話している最中に現れた、あのめっちゃめっちゃ可愛い吸血鬼。

未来はどっちの吸血鬼のパートナーなんだ？

同じパートナーをやっている身でこんなことを言うのはちょっと酷だが、未来には、吸血鬼のパートナーは合わないと思う。

……だって、出血で性別が変わるんだぜ？さつきだって、電話した後に会ったらもう男になってたし……っていうか、その事聞いたら無理矢理話題逸らされたし……

恐らく、電話のすぐ後に血を与えたんだろう。

……不安だ。自分の従姉妹が吸血鬼のパートナーをしている……これほど不安なことはない。

未来と俺は、共に一人っ子。だから、小さい頃は、本当の姉弟のように接していた。もはやそこには、従姉妹なんて壁はなかった気がする。

だから、不安なのだ。自分の姉の安否が、無性に心配になってしまふのだ。

……でも、本人は至って楽しそうだし……それならそれで、良いのかな？

不安を抱えつつ、俺は自分の家の扉を開ける。

”ただいま。”を言う前に、俺は何かを抱きつかれた。

「おかえりっ、陸。」

声の主は、耳元で歓迎される。

「ああ、ただいま。 メル。」

俺は、それなりに呆れた声で答えた。

セーフ？

危なかった……。

暁文の事について訊かれるわ、 그레이の姿は見られるわ、男になったことを問われるわで…… 災難だった。

「はぁ……。」

俺は意気消沈のまま、 그레이のいるリビングへと戻った。

「未来ちゃん……ごめんね。もう帰ったのかと思って……。」

그레이は相当後悔しているようだった。瞳が青い。

「いや、平気……あいつが、さっき電話で話した従兄弟だよ。」

「ふーん……なんか、大人しそうな人だったね。」

「そうか？ちびだし、結構やんちゃだぞ？」

昔の話だが、多分今もそうだろう。

「駄目だよ、従兄弟をちびって言うちゃあ。……僕も結構気にしてるんだし。」

「ああ、そうだったな……ごめん。」

その時

「未来ー。」

俺の名前を呼びながら、紅丞さんが2階から降りてきた。

「……って、なんだ。男になってたのか……。」

なぜか、俺の顔を見て、少し残念そうな顔をした。

「別にいいじゃないですか……。」

「まあそうだけど。」

「紅丞、僕、お腹空いちゃったよ。」

何か言おうとしていた紅丞さんを止めるように、 그레이が血を催促する。

「ああ、解った。」

紅丞さんはグレイに近付き、その場にしゃがむ
グレイは紅丞さんに抱き着くようにしがみ付き、吸血を始めた。

うーん、なんかちょっとジエラシー。……って、何言ってるんだ俺。

「……ありがとう、紅丞。」

「ああ。」

グレイは紅丞さんから離れると、足早に部屋へと戻ってしまった。

「よいしょっ。」

紅丞さんはフラフラしつつ、立ちあがった。

「紅丞さん、大丈夫ですか？」

「ああ、平気。…俺、ちょっと部屋で休んでくるわ。」

そう言うのと、ゆっくりと階段を上って部屋へと行ってしまった。

。

「……はあ、暇だな……。」

玄関で1人。…こういう時は

そっだ、買い物に行こう。

俺は財布と携帯、家の鍵を持ち、コートを着て家を出た。

アルト

「暖かいなあ……。」

周りに誰もいなく、1人なのをいいことに、未来は独り言を呟きながら桜公園の横の道を歩いていた。手には、コンビニの袋をぶら下げている。

……っというか、いくら暖かいとはいえ、後ろを歩いている俺に気付いてもいいのではないだろうか？

「未来！」

仕方なく後ろから声をかける。

「っ!？」

未来は物凄く驚いた顔で振り向いた。

「あ……アルトじゃないか!……久しぶりだな、こんなところで何やってんだ？」

未来は驚きを隠しつつ話しかける。

「……お前、”誰もいない”と思って独り言を言ったけど、それを俺に聞かれて恥ずかしいから”ちょっと誤魔化そう”してないか？」

「え、あ、いや、あの……みんなには、内緒にしてくれないか？」

「言われなくてもそうするつもりだ。……ったく、無防備だなお前も。夏子とは大違いだ。」

「夏子って……誰だ？」

「ん?……ああ、言ってなかったか。夏子は俺のパートナーだ、歳は大体お前と同じくらいだな。」

人見知りで人間不信……簡単に言っていると、たいして命を狙われてもいないのに、無駄に自分を防衛したがるタイプ……って感じたな。」

「へえー……でも、確かアルトも、人間嫌いじゃなかったっけ？」

「ああ、もう慣れた。」

「え、そうなのか？」

「……じゃなかったら俺は未来に話しかけてないぞ？」

「それもそうか……ところで、アルト。」

「何だ？」

「暁文はどうしたんだ？……さっき、アルトのところに行くって出てたはずだけど……。」

「ああ、アカツキさんなら、確かにさっき、俺のところに来たよ。軽く世間話した後、すぐメルのところに行っちまったけどな。」

「メルの所に？……そういえば、メルってパートナーいるのかな？」

「いるらしいぞ？だいたい未来よりも2歳年下らしい。」

「ふーん……。」

「……なあ、未来、ちょっと頼んでもいいか？」

「なんだよ？」

「俺、今腹減ってんだけどさ、お前の血、少しでいいから分けてくれないか？」

瞬間、未来はかなり驚いた顔をしていた。

「……は？今、なんて？」

「いや、だから、腹減ったから、血、分けてほしいんだけど。」

「っ……いやいやいや！無理に決まってるだろ！ふざけんなー！！」

「はあ？なんでだよ。俺はもう向吸血鬼界この世界での権利はとっくに剥奪されてるから多重契約してもいいはずだが？」

「そういう問題じゃねえよ！！血が欲しいんならパートナーからも

「らえばいいだろ!？」

その言葉に、俺は呆れてため息をついた。

「はああ……解ってねえな、お前も。」

「え……？」

「俺がお前の血を欲しがってるってことは、要するに、”性別人間の性別が変わるところが見たい”ってことだろ。解んねえのか？」

「え、いやっ……確かに、俺は吸血鬼界では結構有名みたいけど、なんでそんな……。」

未来は困惑の表情を浮かべている。どうすればいいのか解らないようだ。

「なあ、いいだろ？未来。ちょっとだけ。」

「……。」

未来は戸惑いながら辺りを見渡し

「……ちょっとだけなら。」

了承は得た。

俺は未来に近付き、肩を掴み、口を首に近付け、歯を刺した。

「っ……。」

歯を刺した瞬間、未来の身体が痙攣した。

「……安心しろ、すぐ終わるから。」

「……暁文はいつもそう言っつて、物凄い速さで吸血していくんだけどな……。」

「だから、安心しろって。俺はそんなことしないから。」

「ほ、本当か？」

「……嘘ついて何の意味があるんだよ。」

呆れながら、血が溢れる噛み痕に吸いついた。

甘い。

吸血鬼の血を飲んだ人間の血は甘いという話だが、未来の場合は2人の吸血鬼の血を飲んだから、正直言うとめっちゃめっちゃ甘い。

何度か吸っていると、未来の身体に変化が現れた。

身体が女性化していく。

身長は変わらないまま、体格や髪型、髪の色さえも変化していく。

「あ……アルト……もう、離して……。」

女声で頼まれた。仕方なく離す。

未来から離れ、改めてその姿を見る。

男の時の未来は、髪はショートヘアで黒色、肌も普通で、少し童顔っぽい顔だった気がする。

それに比べて、女の時は、肌の色は変わらなくても、髪はセミロングまで伸び、栗のような茶色に染まっていた。顔も少し大人っぽい。

「へえー……流石なが性別人間。男と女じゃ見た目が違うな。」

「……そりゃあ、性別が変わるんだから、見た目もそのままじゃいけないでしょ……。」

未来は呆れながら呟いた。

「?……その様子だと、口調も変わってるみたいだな。」

「うん。男と女で口調が変わるみたい。性格は同じだけど……っていうか、私、向こうの世界で噂になってるんだよね?そこら辺は解らなかつたの?」

「ああ、お前はただ”性別が変わる人間”としか言われてないから、詳しいとこまでは解らないんだ。」

「ふーん……じゃあ、私、そろそろ行くね?」

「おう、今日はありがとな。」

「うん。それじゃ、また。」

未来は踵を返し、再び歩いて行った。

噂の性別人間、やはり凄い奴だった。

性別が変わるといっても凄い話だが、本人はそのことに一切”嫌”
という表情をしていなかった。

……確かに、吸血鬼界では、未来は”性別が変わる人間”ということ
とと、”正義感が強い”という情報が1番多く広まってはいるが、
それ以外に、”完璧な人間だ”とも言われている。

初め、俺はその意味がよくわからなかったが、未来に会って、初め
てその意味が分かった。

性別が変わる事を、受け入れている。

…完璧だな、確かに。

アカツキさんは大丈夫だろうか？

だって、アカツキさんは完璧というよりむしろ

……やめよう。こんな話はするべきではない。

「…ただいまー。」

家にたどり着き、扉を開けて中に入る。

「おかえり、アルト。」

中から、俺のパートナー　夏子が迎え入れてくれた。

夏子も、正直言つと普通の人間ではないのだが……

その話は、また今度でいいか。

冤罪

「ただいまー。」

玄関の扉を開けて中に入った。

「あつ、未来ちゃん、探したよ?」

グレイがリビングから飛び出してきた。

「え、私を?……ああ、出かけるって伝えてなかった……ごめんなさい。」

「別にいいけど……どこ行って来たの?コンビニ?」

「うん。少し買い出しにね。あ、その途中でアルトに会ったよ。」

そう言った瞬間、グレイの瞳の色が青色になった。

「え……アルトに?」

「そう、だけど……。」

言わない方がよかったかな?

「もしかして、血、吸われなかった?」

「え?……ああ、実はそうなんだよね……。」

確かに、さつき男で、今は女……そりゃあ吸血されたことを疑うわけだ。

「そっか……アルトに会ったんだ……。」

グレイの表情は落ち込む一方だった。

……多分、これ以上踏み込んではいけないのだろう。

その瞬間、ガチャッと扉が開き

「よっ。」

暁文が入って来た。

「アカツキー。」

グレイが笑顔で暁文に近付く。

暁文はグレイの頭を撫でながら

「おう、グレイ。未来に何かされなかったか？」

……だから何もしてないっつーの!!!

不安

その日の夜、部屋でのんびりしていると、紅丞さんが入ってきた。

「未来、ちよつといいか？」

「なんですか？」

「今日学校で見たあの手紙の事なんだが……。」

「手紙って、あの悪戯の事ですか？」

「実は、あの手紙、悪戯じゃないかも知れないんだ。」

「え？………どういう事ですか？」

とりあえず紅丞さんを部屋に招き、詳しく話を聞くことに。

「……俺、あの手紙を見たときさ、視覚がパワーアップしてたんだよ。」

「確か、そうでしたね……。」

「その時にわかったんだけど………あの手紙の字、人の血で書かれてたんだ。」

「えっ！？…人の血、ですか？」

紅丞さんは小さく頷いた。

「……ますます不気味ですね……。」

「ああ。……あの後、何かおかしいことはなかったか？」

「いえ、特にありませんでした。」

「そうか………もしも、何かあったら、すぐに俺に言えよ？」

「はい、解りました。」

「……それじゃ。」

そう言うと、紅丞さんは部屋を出て行ってしまった。

………人間の血………か。

以前、中学の時にイジメを受けていたときは、出血した私の血で教

科書類に悪戯書きされたことはあったけどなー……他人の血は初めてだ。

人間の血を簡単に入手することができるのは、吸血鬼ぐらいしかないだろう。

…手紙を入れた本人が自分の血を使って描いた可能性も無くはないが、それだったら赤いペンキを使ってもいいだろう。わざわざ自分の血を使って危険を被る必要がどこにある？

紅丞さんは”何かあったら、すぐ俺に言え”と言っていたが……。

軽々と言って、危険な事に巻き込んでしまったらと思うと身の毛が
立つ。何かあっても絶対言わない。

「はあー……。」

深くため息をつき、ベッドに腰を下ろす。

……中学の時にイジメを受けていた事を少しだけ思い出した。

些細な事で大けがをして大量出血…大体そこから歯車が狂ったんだよな…。

ことあるごとに体育館裏とかに呼び出され、断れば「性別の事を周りに広める。」と脅され、行ったら行っただで暴力受けて……

先生に相談しようにも向こうも私から遠ざかり……とにかく居場所が無かった。

まあ、小学校も似たような感じだったし、中学で大量出血したときは「ああ、また同じ事されるんだな。」という印象しかなかった。

……怖くなんかない。イジメはもう慣れた。怖いなんて思っていない。
……はず。

「……寝よつかな。」

考えても仕方がない。何かあつたらあつたで、私には強運があるからどーにかなるはずだ。2回も誘拐された経験上そう言える。

私はベッドに潜り、少々早い時間に眠りについた。

不安（後書き）

紅白なう 今年もあと2時間弱！！盛り上がってまいりました！！

何でもない朝（前書き）

あけましておめでとございます。今年も1年、「性別人間シリーズ」をよろしくおねがいたします。

何でもない朝

朝。

7時。マンションに住んでいた頃と違い、だいぶ遅い時間に目が覚めた。

…まあ、学校から遠いマンションから、学校に近い紅丞さんの家に移住したから、たいして遅くても問題ないわけなただけ。

眠い目を擦りながらリビングの扉を開ける。

リビングには、案の定誰もいなかった。

暁文はマンションの方の私の家において、吸血する時のみ、家に来るわけなのだが……

グレイのためにも、そろそろ暁文にもこっちの家に来てもらった方がいいだろうか？

いや、でも、私もある意味、無理矢理紅丞さんの家に居候している身なわけだし……どうしようかな…一応紅丞さんに頼んでみようかな？

悩みつつ、顔を洗い終え、朝食を作るためにキッチンへと向かった。

「ふあああ……。」

7時半。欠伸をしながら、紅丞さんがリビングに入って来た。

「あ、紅丞さん。おはようございます。」

「ん……おはよう。相変わらず早起きだな……。」

「紅丞さんが遅いんです。早く準備しないと遅刻しますよ。」

「はいはい……。」

紅丞さんは逃げるように洗面所へと向かった。

「未来ー、腹減ったー。」

紅丞さんが再びリビングへとやって来た。

「出来てますよ。」

テーブルの上には既に朝食を並べておいた。メニューは、洋風っぽく、トーストとポテトサラダにしてみた。

「…それにしても、なんで紅丞さんの家って、リビングとキッチン離れてるんですか？リビングにも水道あるのに。」

食器棚はリビングにあるくせに、コンロなどはキッチンにあるので、私はいつも、リビングから食器を持って行き、キッチンで料理を作り、リビングでその食器を洗い、リビングにある棚に戻す……という風になっている。

「それなー、俺も疑問に思ってたんだよ。でも、親が教えてくれなかった。」

そう言いながら紅丞さんはテーブルの席に座った。

「あ、それと、あの…ちょっとお願いがあるんですけど…。」

「ん？何？」

「暁文の事なんですけど……グレイのためにも、暁文もこの家に住ませてもよろしいでしょうか？」

「……暁文かあ…本人には聞いたのか？」

「いえ、まだなんですけど……。」

「ふーん…グレイと暁文がいつて言うのなら、俺は全然オーケーだよ。多分、親もまだあと数年は帰ってこないだろうし。」

「本当ですか？ありがとうございます。」

私も朝食を食べるためにテーブルの席に座る。

「……あ、紅丞さんまた野菜残してる。」

「いや、これぐらい勘弁してくれよ。」

「駄目です。ちゃんと食べてください。」

「ええ〜?」

「嫌なら食べなくてもいいんですよ?」

「……………食べる。」

「それでいいんです。」

紅丞さんは多少ふて腐れながらもサラダに箸を伸ばした。

……………まったく、高校3年生の癖に野菜嫌いなんて…考えられない。

「む……………そういえば、未来。」

「何ですか?」

「未来には、苦手なものとかないのか?」

「苦手なものですか?そーですねぇ……………」

そういえば、私の苦手なものってなんだったっけ?

「…幽霊とかは?」

「お化け屋敷や心霊スポットには余裕で入れます。」

「虫とかは?」

「高校入学したばかりの頃に飛んでるゴキブリを素手で捕まえたこ

とがあります。」

「凄っ、三田さんかよ……………え、高いところとかは?」

「通天閣の展望台から街を見下ろしながら”低いなー”って本音を

こぼしたら驚かれたことがあります。」

「お前、前世が鳥かなんかだったんじゃないの?…じゃあ、グロテ

スクなものとかどう?」

「中学校の頃に慣れました。」

「そうか…ふむふむ……………」

「…そんなこと聞いてどうするつもりですか?」

「え?あ、いや、その……………な、何でもないよ、忘れてくれ。」

「……まあいいでしょう。どーせ”私の弱点を聞いて反撃しよう”
とでも考えてるんじゃないっ？」

「うっ……。」

あ、今、目え逸らした。ってことは本当か。

「もーちよっとロクな事考えてくださいよ……受験生なんですから……。」

「わ、解ってるよ……。」

その後、まだ寝ているグレイを放って、私と紅丞さんは学校へと向
かった。

悪夢

「ところで、未来。」

「何？」

「……いつになったら”未来がパートナーをしている吸血鬼”を紹介してくれるのかなー？」

教室へと向かう廊下で、綾子はそう言った。

……現在、放課後。

部活の勧誘中で、綾子と一緒に1年生の教室を何度も巡回していたのだが、教室に誰かいないかどうかふと気になったので、我々の教室へと向かう途中。

「そうだなあ……まあ、その日がくれば……ね？」

「そう言っつて、いつつものはぐらかしてるじゃん……どーゆーつもりい？」

綾子はぎこちなく私を睨みながらそう言った。

暁文の事は、以前綾子に話したことはあるのだが……なかなか会わせる気になれない。

だって、綾子の性格を考えれば、絶対に”吸血してるところが見たい”って言うに決まってるし、あの無理矢理な吸血を見せるわけにいかないし……。

どうにかして誤魔化すしかない。

「こ、こっちだって予定が合わないのよ……。」

「本当？……私、そろそろ我慢の限界だよ。近々佐川先輩の家に乗り込んでやっても恨まないですよ？」

「え、それは困る……。」

どうしようかな…と悩んでるうちに、教室の前にたどり着いた。

綾子が扉を開けようと手を伸ばした　その時。

ドオン！！！！

まるで大きな何かを壁にぶつけたかのような、そんな音が教室内部から響いた。

その音に、綾子の手が止まった。

「な……………何？今の。」
引きつった表情でこちらへ振り返る綾子。
その瞬間

ガラッ！！

今度は勢いよく扉が開いた。

そこにいたのは

赤い目をした

吸血鬼だった。

事件

「!?!」

綾子が怯んだ瞬間、吸血鬼は腕で綾子の首を軽く絞め、懐からナイフを取り出し、綾子へと向けた。

まるであの時の、グレイがレミに捕まったあの時を思い出させるような光景だった。

「綾子っ!?!」

綾子は怯えきつた表情をしている。

「入れ。」

吸血鬼は私を真っ直ぐ見ながらそう言った。

私はゆっくりと教室の中へ足を踏み入れた。

中をみて、私は驚愕した。

机や椅子は全て教室の後ろの隅に追いやられ、代わりに黒板の前には、数人の生徒が座っていたのだ。

しかも、その7割が 私と綾子のクラスメイトだった。

2年へと進級するとき、”1年の頃とクラスは変動しない”と聞いたので、大体みんなの顔と名前は覚えている。

……でも、何故吸血鬼はこんなことを?

「きゃあっ。」

綾子と私は、吸血鬼に突き飛ばされるように、その人ごみの中へ押し込まれた。

「……さて、そろそろメンバーもそろったことだし。」
そう言うと、吸血鬼は突如、私の腕を掴み、人ごみの中から引っ張り上げた。

そして

持っていたナイフで、私の腕を　切り裂いた。

一瞬、何が起きたのかわからなかった。

朝と昼、暁文に吸血されていないせいで、私の身体には今、血が通常以上に溜まっている。

その血が、腕の傷から容赦なく噴き出す。

「きゃああっ!!!」

1人の女子生徒が、悲鳴を上げた。

吸血鬼は私を、見下すような目で見ています。

意味が解らない。

「あんた…何がしたいの!？」

「何がって、解らないの?…手紙まで出したのに?」

「手紙って……。」

思い出した。

昨日の、あの手紙。

目の前にいる、こいつが、その送り主……。

絶望って、一体どういう ?

「いやあ、それにしても、来るタイミング間違えたかなあ。もう少し早く来れば、たくさんの人間を傷つけることができたはずなのになあー。」

吸血鬼は笑いながら答えた。

傷つけるって……そんなこと……。

「…ふざけんなっ……。」

「ん？」

「ふざけたこと言ってんじゃねえ!!!俺以外のっ……俺の友人を傷つけるんなら容赦しねえぞ!!!!!!」

叫んでから、気付いた。

遅すぎたんだ、気付くのが。

性別が変わってる。

しかも、クラスのみんなの前で。

恐れていたことが、現実になった。

絶望 それは、俺の性別が、クラスメイトにはれること。

奴の狙いは、それだったんだ。

「あー…おっかしい。本当に馬鹿だなあー最近の人間は…怒るとすぐ周りが見えなくなる。だから面白いんだよなー。」

そして

「……私の名前はメイズ。これでも一端の吸血鬼だ。…それじゃ、安藤未来さん、また会える日まで!！」

そう言うと、その場で小さくジャンプし、姿を消してしまった。

終わった。

何もかも、
終わった。

気が付けば、俺は走り出していた。

教室を出て、ひたすら廊下を走った。

その後、どうやって家まで帰ったのか

よく覚えていない。

絶望

日比野から、”未来の性別が、周りのクラスメイトにバレた”ことを詳しく伝えられた。

性別が周りにバレる　未来が、1番恐れていたことだ。

なるほど……だから、いつまで待っても未来が戻ってこないわけだ。鞆を置いたまま帰るなんておかしいと思ったし。

「佐川先輩、今は早く帰ってあげて下さい。未来、多分家に帰っているとと思いますので……。」

真面目な表情をした日比野からそう言われ、俺は自分の鞆と、未来の鞆を持ち、ダッシュで家に帰った。

「はあ……はあ……。」

家に帰り、扉を開ける。　玄関を見ると、未来の鞆があった。鞆を持ったまま、2階にある未来の部屋へと向かう。

部屋の前には、 그레이がいた。

「紅丞……。」

그레이は、部屋に入ることなく、扉の前で茫然と立ち尽くす状態で俺を見ていた。…少し泣きそうな顔をしている。

「 그레이、何かあったのか? 」

「未来ちゃんがいきなり帰ってきて…何があったのか聞こうとしたんだけど、何も言わずに部屋に入っちゃって……鍵も書けちゃったみたいで、僕、どうすればいいのか……。」

グレイの言葉を聞き、ドアノブを回す。だが、やはり鍵がかかっていた。

俺は咄嗟に財布から10円玉を取り出した。こつこつので開くタイプの鍵でよかった。

10円玉を器用に使い、ゆっくりと鍵を開ける。

「……グレイはここにいろ。」
小さく呟き、音を立てない様に部屋に入った。

未来は、部屋にあるベッドの上で膝を抱えてうずくまっていた。ジャージの袖が、まるで刃物で切り裂かれたようになっていた。

「……未来。」
小さく呼びかけると、未来は涙で濡れた顔で俺を見上げた。

「……紅丞さんっ……。」
未来は俺の顔を見るなり、抱き着いてきた。

「!?!?…ちよっ、未来?」

いきなり抱き着かれ、怯む俺。でも、未来は

「っ……っ……っ……っわああああっ。」「
泣いていた。未来は、俺にしがみ付きながら、泣いていた。

「未来……。」「
無意識のうちに、俺も、未来を抱きしめていた。。

慰め

……こういうとき、俺はどうすればいいのだろうか。
黙ってそばにいるべきか、それとも1人にするべきか……。

考える必要もない。明らかに前者だ。

未来がようやく少し落ち着いてきた時、俺はとりあえず着替えようと部屋を出ようとした。
だが、ベッドから立ち上がった直後、未来が俺の制服の端を掴み、こう言ったのだ。

「あのっ……まだ、ここにいてくださいっ……。」

驚いた。

正義感が強くて、俺よりも大人なあの未来が、1人になることを拒絶したのだ。

当たり前だ。未来だって、人間なのだから。

俺は少し、未来を買い被っていたのかもしれない。

俺はまだすすり泣いている未来の横に座りなおした。

「紅丞さんっ……私、性別の事…みんなに知られちゃって…。」
未来はしゃっくり交じりでそう言った。

「…いいよ、日比野から聞いた。話さなくていい。」
「でもっ…。」

「日比野から聞いた情報だけで充分。後は聞こうとしないし、聞くとも思わないから。」

「……わかりました…。」

そう言うと、未来はいきなり俺の肩に身を寄せた。

「あの……紅丞さん、しばらくこうしててもいいですか…?」

「え、あっ…ああ、かまわないよ。」

ヤバイ、今、俺の顔、多分物凄く赤くなってると思う。

「紅丞さん……。」

未来が眠そうな、ぼんやりとした声で話しかけてきた。

「ん?」

「私、明日から、どうすればいいんでしょう…?」

そうだ。問題はこれからの事だ。

日比野の話によると、教室にいた生徒は約40名、そのうち7割が未来のクラスメイト、その他3割の中には、3年生もいたらしい。
……もう今頃、学校中にそのことが知れ渡っていても不思議じゃない。

「そっだなあ……あ、そうだ。」
ちよっといいこと思いついた。

「……未来、明日は学校休め。」

「えっ…?」

「俺が明日学校へ行く。そんなでもって、日比野から、その後どうなったのか聞いてくるから、それから考えよう。」

悪く言えば、結論を先延ばしにすることになるが、やらないよりはマシだろう。

「紅丞さん……」たまには”いいこと思いつくんですね。”

「たまには”って……毒舌は健在かよ。」

「ふふっ……でも、そうですね…じゃあ、明日はよろしくお願いします。」

そう言つと、未来は目を閉じ、眠ってしまった。泣き疲れたらしい。

その瞬間

キィイーン……

酷い耳鳴り。…聴覚がパワーアップする。

「っ……!」

聴覚がパワーアップした瞬間、いきなり轟音が聞こえたりすることがあるから、思わず身構えてしまった。すると

トクン、トクン　という、少し小さめの音が聞こえた。

これって……ああ、未来の心臓の音か。そりゃあこんなに近くにいらんだもんな…聞こえるわけだ。

もちろん、それだけじゃなく、スウスウという寝息もハッキリと聞こえる。

……って、これに聞き入ってる俺って物凄く変人じゃないか……しっかりしろ、俺。

俺はとりあえず未来を起こさないようにゆっくりとベッドに寝かせ、音を立てないように慎重に部屋を出た。

部屋の前には、グレイがいた。どうやら出てくるまで待つてたようだ。

「あつ、紅丞。…未来ちゃん、どうしたの？」

「ん、ちよつとな。気にすんな。」

「何で？気になるよ。」

「いいから。…とりあえず、今はそつとしておけ。」

「……解った。ところで、紅丞。」

「ん？」

「お腹空いたよ。」

「ああ、そういえば、朝も昼も吸血してなかったな……。」

「そつだよ。まったく……どうして僕を起こさずに学校に行っちゃうかなあ。」

やっぱり、少し怒っているようだった。…瞳が黒い。

「悪かったって……でも、起きなかったグレイも悪いんじゃないか？」

「そ、そつだけど……。」

「…ま、いいか。ほら。」

俺はその場にしゃがみ、グレイに視線を合わせる。

「そんじゃ、今日はいっぱい吸血しないとね。」

グレイは俺に抱き着くようにしがみ付き、勢いよく歯を刺した。

「いってえ……そんな強く刺さなくなつていいだろ……。」

「ん……ごめんごめん。」

軽く謝り、すぐさま吸血した。

数分後、グレイは俺から離れた。

「ふう。……紅丞、大丈夫？」

「いや……大丈夫じゃない……。」

グレイは身体が小さいから、吸うときに時間がかかってしまう。

しかも、今回は朝と昼、および夜の分も血をあげたから、かなり時間がかかってしまった。

「……なんか、身体中痛い……。」

「えっ……ごめん、じゃあすぐに部屋に……。」

俺はグレイの手を借りつつ、部屋へと向かった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9628z/>

性别人間と幽霊人間

2012年1月1日02時45分発行